

日本・アジアのキリスト教—賀川豊彦(3)

芦名定道

日本・アジアのキリスト教の歴史を振り返りつつ、その新しい思想的可能性を探ることは、日本におけるキリスト教思想研究にとって重要な意味を有している。この演習では、年度や学期を超えて、明治期以降の重要なキリスト教の思想家たちを順次検討してゆくことによって、近代キリスト教思想の重要な局面の解明がめざされている。今年度後期は、前期に引き続き、近代日本を代表するキリスト教思想家・実践家である賀川豊彦のテキストを読み進めてみたい。合わせて、賀川研究に関連した研究文献を講読する。

<演習のスケジュールと場所>

演習日（後期・金2）：10/4, 11, 18, 25, 11/1, 15, 29, 12/6, 13, 20, 27, 1/10, (16), 24
場所：キリスト教学研究室

・初回の授業では、本演習のオリエンテーションを行い、演習の目的や進め方を確認する。3回目以降は、賀川豊彦『友愛の政治経済学』を、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。

- ・10/4：オリエンテーション+導入（本日）
- ・10/11：昨年度後期のまとめ+担当者確定（テキストの配布、PDFファイルをKULASISにアップ）
- ・10/18～：演習
- ・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。
- ・必要な解説を行う（芦名）。
- ・成績はゼミでの発表（少なくとも一回）によって評価する。

<テキスト>

- ・賀川豊彦『友愛の政治経済学』（日本生活協同組合連合会）

<賀川豊彦の略歴的説明>（『岩波キリスト教辞典』の項目・金子啓一）

- ・1888-1960。神戸で生まれ、父母の病死で徳島で育つ。
- ・キリスト教社会運動家、伝道者。
- ・宣教師マイヤース（南長老ミッション）に出会い受洗、明治学院、神戸神学校で学ぶ。
- ・肺結核で死の宣告を受ける。
- ・1909年、貧民伝道・奉仕のため、神戸新川スラムに転居。女工のハルと結婚。
- ・関西労働同盟会結成、神戸川崎造船大労働争議の指導。
- ・日本農民組合、消費組合（神戸購買組合→コープこうべ）の設立。
- ・1914-17：渡米、プリンストン大学、プリンストン神学校。
- ・1919年、日本基督教会の牧師資格（麴町教会）
- ・神の国運動（1929-1932、33-34）の全国展開。
- ・第二次世界大戦後、日本社会党結成に協力、イエスの友会、キリスト新聞社を興す。
- ・『死線を越えて』（1920）
- ・没後、『貧民心理の研究』（1915）の差別記述、戦時中の軍部への協力が問題となる。

<演習の背景・経緯>

・日本・アジアのキリスト教研究に向けて

- ①東北アジア（朝鮮半島・日本・中国・台湾）のキリスト教
- ②宣教師サイドからの視点との統合
- ③アジアにおける新しいキリスト教形成の可能性
- ④アジアの固有の課題とキリスト教（アジアの近代史のコンテクストにおいて）
- ⑤フィールド・ワークにおける研究方法の確立
- ⑥共同研究の実施

<日本キリスト教史の現状>

- ①通史の試み
- ②個別教派・教団・教会の歴史編纂
- ③宣教師の伝記・書簡・公式の報告書
- ④人物研究（内村、新島、海老名、新渡戸、植村など）
- ⑤新聞・機関誌などの基礎資料の整備

全体的に、日本キリスト教思想研究が、各地の研究グループレベルの議論を超えた、キリスト教研究としてまだ確立していない。

土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』（教文館）

<文献>

より包括的な文献表としては、<http://tillich.web.fc2.com/sub9.htm>、<http://tillich.web.fc2.com/sub9a1.htm> を参照。

Barrett, Kurian, Johnson (eds.), *World Christian Encyclopedia*. vol.1-2, second edition
Oxford University Press 2001

Scott W.Sunquist (ed.), *A Dictionary of Asian Christianity*, Eerdmans Publishing 2001

国際基督教大学・アジア文化研究所編 『アジアにおけるキリスト教比較表』（創文社）

日本基督教団出版局編 『アジア・キリスト教の歴史』（日本基督教団出版局）

富坂キリスト教センター 『鼓動する東アジアのキリスト教』（新教出版社）

鶴沼裕子 『史料による日本キリスト教史』（聖学院大学出版会）

隅谷三喜男 『日本プロテスタント史論』（新教出版社）

『近代日本の形成とキリスト教』（新教出版社）

出口光朔 『近代日本キリスト教の光と影』（教文館）

土肥昭夫 『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社）

『歴史の証言 日本プロテスタント・キリスト教史より』（教文館）

海老沢有道・大内三郎 『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局）

中央大学人文科学研究所 『近代日本の形成と宗教問題』（中央大学出版部）

高橋昌郎 『明治のキリスト教』（吉川弘文館）

古屋安雄・大木英夫 『日本の神学』（ヨルダン社）

武田清子 『土着と背教——伝統的エトスとプロテスタント』（新教出版社）

古屋安雄他 『日本神学史』（ヨルダン社）

石田慶和 『日本の宗教哲学』（創文社）

マーク・R・マリNZ 『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』（トランスビュー）

1. 雨宮栄一『青春の賀川豊彦』（2003）、『貧しい人々と賀川豊彦』（2005）、『暗い谷間の賀川豊彦』（2006年）新教出版社。
2. ロバート・シルジェン『賀川豊彦——愛と社会正義を追い求めた生涯』新教出版社、2007年。

3. 阿部志郎・雨宮栄一・武田清子・森田進・古屋安雄・加山久夫
『賀川豊彦を知っていますか』教文館、2009年。
4. 賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦』新教出版社、2011年。
5. C・H・ジャーマニー『近代日本のプロテスタント神学』日本基督教団出版局、1982年（原著・1965年）
第二章「近代における日本自由主義神学とその社会に対する関心」
海老名弾正（一八五六—一九三七年）
大塚節治（一八八七年生まれ）
賀川豊彦（一八八八—一九六〇年）
6. Thomas John Hastings, *Seeing All Things Whole. The Scientific Mysticism and Art of Kagawa Toyohiko (1888-1960)*, PICKWICK Publications, 2015.
7. Kagawa Toyohiko (Edited with an Introduction by Thomas John Hastings), *Cosmic Purpose*, CASCADE Books, 2014.

<賀川研究より>

1. 竹中正夫「賀川豊彦における基督教倫理」（1960年）（賀川豊彦記念松沢資料館『日本キリスト教史における賀川豊彦——その思想と実践』新教出版社、2011年）。

「おそらく日本におけるキリスト者と社会問題の関連において賀川豊彦ほど問題を広範な領域にわたって提示している存在はないであろう。」(15)

「日本のキリスト教と社会のかかわりにおいて、賀川豊彦が歩んで来た道は独自のものがあってということである。」「信仰と社会的活動を二分せず、又二者択一の形をとらずに、一貫してキリスト教信仰を保ちつつ、又はキリスト教信仰を保つ故に、社会の問題に関与して行った点に賀川豊彦の存在が意味をもっていると思うのである。」(16)

「彼は組織神学者ではなく、伝道者である。学者ではなく詩人である。」(16)

「賀川豊彦にとって宗教は教理、教説ではなく、具体的な生き方となってあらわれるものであった。彼にとっては具体的な行動の中に滲透して来ない宗教は理解しがたいものであった。この点に於いて彼は信仰と生活、宗教と倫理を二分する二元論に対して強く反対した。この観点から彼は自己の宗教的集団の維持拡張にとらわれている制度的な宗教集団に強い批判をなしている。」「彼にとって宗教は生きる道(**religion is a way of life**)であり、キリストの十字架に於いて完全にあらわされた神の愛が彼の信仰の核心をなしている。」

「内村鑑三」「賀川はキリスト再臨よりもむしろ現実の社会の中に神の贖罪愛の内在を強調した。」(19)

「すべての生の領域はこの神の愛の下にあり、神の愛は普遍的であり且つ内在的である。・・・彼は「宇宙は神の上衣である」と呼び歴史を通して神の働きを論じている。・・・彼はキリストにおいて顕わされた神の愛を信ずるのであって、唯一神、人格神がその基調をなしている」(20)

「賀川豊彦の神学に於て、神と人を結び又社会における人と人との結ぶ概念として特に用いられている表現は意識という言葉である。彼は意識に無意識、半意識、全意識の三つの段階のあることを説いている。」「無意識の段階・・・自然的本能」「半意識の段階において倫理的なめざめなされ」「全意識の段階においては人間の捧げるいけにえは不充分であることが意識され、神自らキリストにおいてにいけにえとしてその生命を捧げることが示されている。・・・神の意識」「十字架意識」「贖罪意識」「之が社会における人間と人間を結ぶ概念としては連帯意識と呼ばれており、彼の倫理学の中心的な概念となっている。」(21)

「悪を救わんとする意識」「悪を修繕せんとする愛に目醒める。」

「イエスの贖罪意識が神と人との結ぶ紐帯であると共に、社会的連帯意識又は責任意識と

して人と人とを結ぶ紐帯となっている。」

「賀川豊彦はこの宇宙的愛の完全なる顕現をキリストの十字架に見出している。」「聖なる社会秩序の頭」「社会秩序の建設の為に愛の必要」「この世に神の国を来らせる為に」(22)「キリスト教の本質である十字架意識の原理が経済活動の本質とならなくてはならない。」「人格的社会連帯意識性を強調する宗教運動は経済運動であり、経済運動は宗教運動である。彼は個人と社会、信仰生活と社会生活・宗教と道德の二元論に強く反対する。両者は破壊連帯意識性の中に一つとして結合される。」

「経済と云うものは、「物質」を仲介物にはするけれども、その目的は生命及労力の維持、発展補修にある。生命を労働を通じて、心理生活の向上をもくろむ。」(24)